



四国化成工業は2017年3月期から3年間の中期経営計画で「新規コア製品」の確立を最重要戦略に掲げる。中計期間中に少なくとも数億円規模の収益が見込める新製品に経営資源を集めて育成する方針。玉城邦男社長兼最高経営責任者（CEO）は「強靱で筋肉質な企業体を目指し、次世代の収益基盤を作り上げる」と語る。

化学品事業では、電気・電子材料の高機能化につながる樹脂添加剤などの機能材料、プリント配線板の銅回路と樹脂の密着性を高めて高周波の伝送損失を低減する密着性向上プロセス「G i C A P」などの顧客提案に



玉城邦男 社長
兼CEO

新規コア製品確立に注力

注力。バラスト水処理装置向け薬剤「ネオクロールマリン」はJFEエンジニアリングと連携し、環境保護の国際条約発効を見据えた準備を進める。建材事業ではアルミ建材と壁材を組み合わせたアルミシステム塀「Art Wall」で窯業系建材の独壇場であった「塀」領域を開拓する。

樹脂添加剤やゴム薬品の開発力を高めるため、今年10月に研究開発拠点（香川県宇多津町）で物性評価棟が完成する。新規コア製品の量産対応にともなう追加的な設備投資も念頭に置く。顧客や

市場視点を意識したマイケティングを重視し、外部機関との連携強化で研究開発のスピード向上を図る。

主力事業では、世界シェア2位のラジアルタイヤ向け不溶性硫黄は丸亀工場（香川県丸亀市）の設備増強が17年に完了する。生産能力は従来比で3割増えることから、欧米などの市場開拓に力を入れる。世界シェア首位のプリント配線板向け耐熱型水溶性防錆剤「タフエース」もアジア地域での体制を強化しながら事業の足場を固める計画だ。



密着性向上剤「G i C A P」
など顧客提案に力を入れる